

長野県埋蔵文化財ニュース

No.16

1986.3.20

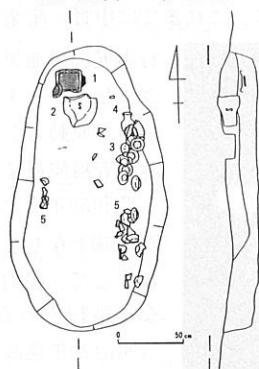
(財)長野県埋蔵文化財センター

松塩 筑 調査事務所
〒399-07 塩尻市広丘高出1977
TEL 0263-54-2150



SK-128出土の緑釉陶器と灰釉陶器

- 1 八稜鏡
- 2 漆塗木製品
- 3 緑釉陶器
- 4 灰釉陶器
- 5 土師器



SK-128遺構全体図



SK-128遺物出土状況

緑釉陶器 7点一括出土の

吉田川西遺跡

田川緑辺にある本遺跡は、平安～近世に及ぶ遺構・遺物が多量に検出された。中でも平安時代は住居址だけで271軒を数え、遺物も多種多様で、越州窯青磁・白磁、筆の穂先、鉄鐸、「県」の墨書土器など、当地方でも特殊なものが少なくない。

ここに紹介するSK-128は、居住区域の緑辺にある長楕円形（119×220cm）を呈した土壌である。遺物は木質部を失った漆塗の盆と椀が北側近くの頭部位置に置かれ、その下に八稜鏡が納められていた。土器類は東壁側に列状に検出された。北側より灰釉陶器長頸瓶1点と緑釉陶器7点、ロクロ調整の糸切痕が残る土師

器坏13点と高台付椀3点である。緑釉陶器は大小の椀が各1点、皿4点、耳皿1点で、底部を除き鮮やかな濃緑色の施釉がみられる。また内面には巻線が一条まわり、高台内側には段がある。産地については近江地方をあげる研究者が多いが、今後の検討をまちたい。

本址が出土遺物の配置や内容からみて、墓址であることは間違いない。類例は今のところ群馬県山王廃寺側の水瓶をもつ7点セットしかない。なお緑釉陶器片は約600点もあり、器種も豊富で、そのあり方は全国的にも突出した事例といえよう。ちなみに遺跡周辺は「良田郷」に比定されている。（調査研究員 原明芳）

埋蔵文化財施設紹介



中野市歴史民俗資料館

中野市歴史民俗資料館は、郷土の素晴らしい歴史や民俗・芸術・文化をはだに接して、みんなに親しまれる「ふるさとづくり」を目的に、昭和56年10月2日に開館しました。建物は、鉄筋コンクリート造・平屋建て、敷地630㎡の中に展示室（200㎡）、収蔵庫、管理室等が設けられています。

場所は、中野市郊外に建設された中野市一本木公園の一面にあり、天気の良い休日には終日親子連れの明るい歓声でにぎわっています。過日、公園内には中野ゆかりの彫刻家故菊池一雄先生の作品5点の建立が完成し、当資料館とともに中野市を代表する総合文化公園として、広く市民の憩いの場となっています。

展示室内は、コーナー別に常設展が行われており、玄関を入るとまず、年に3～4件の割で指定される市指定文化財並びに国・県指定の文化財が、パネル写真によって紹介されているコーナーがあります。次に続く埋蔵文化財コーナーでは、今から約1万5千年前から4～5百年前にかけての当市から出土した考古資料が、展示室の約3分の1を占めて展示されています。中でも完形に復元された土偶（写真）を出土させた大俣姥ヶ沢遺跡（縄文時代中期）の資料は、これまで縄文時代の発掘例の極めて少なかった当市にとって、その石器・土器等の多量の出土例、遺跡の重要度からも特に貴重な資料となっています。

また、高丘陵地を中心に造営された須恵器を製造した登り窯は、現在70基余（消滅したものも含む）が確認されており、今後も発見例が期待され、県下でも重要な生産遺構として広く知られています。この他に、昭和44年に発掘調査が行われた、古墳時代中期の土器集積を伴う祭祀遺跡である新井大口フ遺跡は、遺物の出

土量、規模からも長野市駒沢新町遺跡に次ぐものであり、当市に存在する埋蔵文化財の中でも、特に貴重な遺跡・遺物としてあげられる資料の1つです。

このほかに、中野市ゆかりの文化人コーナーとして、日本を代表する作曲家の中山晋平先生の遺品、大正天皇の御教育掛を勤め、明治・大正期を通じて日本の教育界に多大な功績を残した湯本武比古先生の遺品、

また郷土玩具として広く全国に知られる中野土びなを紹介する土びなコーナーなどがあり、一目で中野市の歴史・文化を理解できるようになっています。

そして当資料館のもう一つの特徴に、年6回程度開催される特別展があり、この数は他に類のないものだと思います。内容は、中野市内にテーマを設けて歴史・民俗・芸術・考古等、資料館専門委員（10名）の指導をうけながら、各部門ごとに展示を行っています。ちなみに、これまでに中野の産業歴史展、郷土の年中

行事展、菊池契月作品展等を行ってきましたが、すべてに市民の理解と協力が原動力となっており、町ぐるみの資料館運営を自負しています。

昭和59年度には、市民の熱い願いが発端となり、文化財保護事業の一環として、明治中期を代表する貴重な建築物である中野小学校旧校舎（明治29年建設）を資料館横に移転復元し、教室を利用して教育資料・民具等を展示・公開するとともに、校舎を中野市有形文化財に指定し、保存・保護に努めています。



大俣姥ヶ沢遺跡出土の「土偶」

<昭和61年度の予定>

中野市の産業歴史展Ⅱ、ふるさとの玩具展、中野市の弥生時代展、寺瀬黙山作品展、砥砥展（絵画展）等

所在地 中野市大字一本木495-6 TEL0269-22-2005
開館 午前9時～午後5時
入館料 無料
休館日 毎週月曜日、国民の祝日の翌日、12月27日から翌年1月5日
交通 長野電鉄 中野松川駅下車北へ徒歩5分。

発掘調査紹介

開田村 大原遺跡

調査団長 神村 透

御岳山東麓に広がる開田高原は、柳又遺跡の調査によって、旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡がいくつもあることで注目されている。大原遺跡も尖頭器・有舌尖頭器・楕形石鏃などが表面採集されていて、時代の接点にある遺跡の一つとして注意されていた。

農業機械の大型化による深耕、御岳山の火山灰の影響をなくすための天地返しなどがされて、柳又遺跡や西又Ⅱ遺跡などではローム層まで耕作され、旧石器時代の包含層はなくなった。そのため大原遺跡は貴重となった。

伊那市から木曽福島町を通り高山市に通ずる国道361号線が、開田村に入る地蔵峠が急坂、急カーブ、そして冬の積雪もあって、折橋峠をトンネルで開田村に入る前に路線を変更して改修されることになった。トンネル工事が今秋開通し、トンネルから村に入る新設道路も予定線がきまり、工事も着手された。その予定線が大原遺跡を横切ることが明確となって、県教育委員会の指導を得、開田村教育委員会が長野県木曽建設事務所から委託をうけて調査することになった。

調査は村教委が組織した調査団と老人クラブの方々の参加で60年7月に行った。路線中内ということと包含層が浅いこともあって順調に終了した。

調査区域は大原遺跡のある段丘面の北端をかすめるという位置なので、遺構は土壌3と少なくその中心は調査地の南側、段丘縁にそってあると考える。遺物は包含層のある部分が狭かったこともあって量的には多くないが、押型文土器とそれに伴出する石器があって、木曽だけでなく、長野県的にも貴重な資料である。それは押型文土器が高山寺式土器とよばれる一群の土器で、今まで県内では断片的にしか知られていない土器であるため、細久保式土器との関係、そして押型文土器の終末を知る資料となる。

表採で尖頭器があったので期待していたが、完形の尖頭器1と破片1の2点しか出土せず、有舌尖頭器も得られなかった。尖頭器は写真のように頁岩製のていねいなつくりの比較的大きなものである。

早期の土器と石器は現在整理中なので詳細は報告書に譲りたい。早期土器は押型文土器、撚糸文土器、無文土器がほぼ同数あって、他の有文土器は少ない。押型文土器はほとんどが楕円文で、山形文は9片と少な



大原遺跡出土の尖頭器

く格子目文はない。楕円文は大きく2群あって、穀粒状で器厚のあまり厚くない細久保式土器と、粒が粗大円形か、穀粒状で器厚の厚く、口縁付近では内側に斜走の溝をもつ高山寺式土器がある。

撚糸文土器も細久保式土器に伴出する横走る撚糸文と、高山寺式土器に伴出する部厚くて格子状の撚糸文があって後者が多い。

無文土器はほとんどが高山寺式土器に伴出する部厚い土器である。

数少ない有文土器の中には、鋭い沈線の間に貝殻腹縁文をつけた土器があり、関東の田戸式土器とは違った表情をしていて、飛騨を通して日本海側とのつながりが考えられる。

石器では剥片石器が多く、石鏃が62点と図抜けて多い。形としては楕形石鏃が多い。他はスクレーパーや不定形剥片石器であるが、形の整った石匕もある。いわゆる打製石器は少ないが、特殊磨石が66点と多く、これとセットとなるのが平板石皿と思うが、その完形品はない。明確ではないが平板石の破片が多いのが注目される。一点だけであるが中央に溝状の凹みのある平板砥石が出土している。

なお、破片ではあるが環状石器の未製品が2点あって、縄文時代晩期から弥生時代の石器とされる環状石器が押型文土器に伴出することを知った。最近北九州でも押型文土器に伴出している例があり、トロトロ石器の分布と高山寺式土器の分布と合わせて、広い分布の一端の姿と考える。

県内では立野式、樋沢式、細久保式の資料は多く、これに続く押型文土器の資料は断片的であった。今回の大原遺跡の調査で、多量とはいえないがまとまった資料としての高山寺式土器が出土したのが大きな成果であった。今後、木曽谷の押型文土器出土遺跡資料や隣接する岐阜県飛騨地方の同種資料との比較検討によって、より具体的な結果がえられよう。

昭和60年度

長野県埋蔵文化財センター

事業のまとめ



1. 事業概要

事務局長 西沢 宣利

まわりの山々の紅葉がいつしか白くなり、霜柱が、そして雪が……という季節となってしまいました。

埋蔵文化財センターの発掘作業ですが、気象条件や整理事業日程等のことから例年11月末で発掘を終らせているのですが、本年度は県民が強く望んでいます豊科インターまで62年度開通を目途に進められている道路建設の工事工程との関連、それに発掘調査面積が大巾に増えたことから12月以降も発掘現場の凍上防止、調査研究員と作業員の防寒措置等を講じながら発掘作業期間を延長することとなりました。

が、関係者皆様の御理解と御協力によりまして、職員全員が一丸となって努力をいたしました結果、昨年は12月27日の松本地籍の南栗遺跡を最終に、更に61年に入ってから、豊科町上手木戸遺跡も急提調査することが決定し3月末に新年度へ一部残して完了し、ここに予定した発掘作業は全部終了することができました。

本年度の発掘調査についてふりかえてみますと、気候的には、前半梅雨の期間が長く続いたため発掘現場の凹地に水が溜りこの排水作業をしなければならないといったことがあったり、梅雨が明けた途端に一変例年になく猛暑炎天が続き今度は散水をしなければ作業ができないといったことになりすっかり天候に振り廻された形となり大変苦しい作業が続きましたが、大きな事故もなく問題もなく調査研究員と作業員が一体となって頑張り作業を遂行することができました。

調査面積についてみますと、当初の計画では塩尻市地籍10遺跡、松本市地籍7遺跡の185,200㎡で前年の68,100㎡に比べて117,100㎡も多い面積で出発したのですが、年度途中で新たに2遺跡が確認され追加となり、また発掘調査中の遺跡で調査面積の広がりがあったり、豊科町上手木戸遺跡を追加したため、結果的に約242,300㎡の面積の発掘調査が必要となりました。

このようなことから調査研究員については、前年の23名から大巾な増員を得て当初50名の体制で発掘を開始したのですが、前述の面積増に対応するために緊急的に更に増員が必要となり8月以降段階的に増員が行われ12名が加わり62名という大職員でこれに対応することになりました。

道路建設工事の工程や部分完成期限等から各遺跡の発掘作業の期間も制約されるため、しばしば班の組み替、発掘現場の移動を余儀なくされたこともあり、計画を立てる方も現場を移動する方も大変な苦労がありました。

発掘面積が増えたことは、調査研究員を増やすことだけではなく当然ながら作業員の増にもなり約100名程の増員を計画することになりました。

この募集については、シルバーセンタや遺跡周辺の関係市町村に強く協力依頼したのは勿論ですが新聞の折込広告、口伝等あらゆる手段を労してなんとか予定する人員を確保することができました。ところが広い範囲から募集したことからその送迎についても考慮する必要性が生じ、いろいろ検討を行った結果、新方式によるリースのマイクロバスを運行することになりましたが、この方式は経費の節減とともに能率のアップをも図ることができました。

面積の増、人員の増から必然的に職員棟、作業棟等が手狭になり、一部建物を増やしたことから当初では1,330㎡余であったのが1,550㎡余とこれも増えることになりました。

発掘作業が終了全員が整理事業に入った1～3月には、会議室も倉庫も図面が広げられ面的に使えるところはすべて整理事業場となってしまいました。それでもまだ足りず一部の班では寒風の吹きぬける発掘現場の作業小屋で整理に頑張った職員もいる現況です。いま大小さまざまな図面類が他のカード類と共に部屋一杯に広げられて作業が進んでいます。

以上のように本年度の発掘作業はいろいろなことがありましたが、何とか予定した面積の発掘が終了した現在では、埋蔵文化財の発掘、調査、保護のポイントであるといわれる整理事業に全力を傾注しているところですが、このような段階まで進んできましたのも当埋蔵文化財センターの発掘調査に関係された方々の暖かい御指導と御支援、絶大な御協力があつた結果と深く感謝申し上げる次第であります。

今後とも一層の御指導と御協力が必要となりますがよろしくお願い申し上げます。

2. 調査概要

調査第一部長 樋口 昇一

調査面積約24万㎡、検出住居址約700軒、掘立柱建物址約130棟、土墳は2,000基以上——という数字のみあげても、本年度調査の大規模さが一目瞭然であろう。ちなみに、昭和45年～53年の9年間にわたった中央道西宮線の調査でさえ、総面積は29万㎡、住居址1,500軒であった。調査員数・遺跡内容など諸条件はちがうものの、いかに本年度が飛び抜けた調査の連続であったかが理解していただけるであろう。

まだ整理作業も本格化していないが、調査部門に限ってその大要を述べたい。

〔調査遺跡概要〕

本年度発掘調査した遺跡の立地状況をみると、塩尻市の鉢伏山麓地帯と松本平南部低位段丘面の現水田地帯とに二大別できる。前者は縄文時代を主とし、一部弥生・古墳時代に、後者は専ら平安時代が卓越し、それに少なからず古墳・奈良・中近世の遺構・遺物が検出された。この松本平南部の水田地帯は、昭和30年代に故藤沢宗平氏ら一部の研究者に注目されていたものの、ほ場整備に伴う本格的調査が松本市教委によって実施される近年まで、考古学的には不毛の地で、むしろ条里遺構や古文書にある郷名比定などの点から文献史学側のアプローチが目立っていた。ところが近年の松本市教委による調査の結果、この地一帯に古墳～平安時代を中心に相当規模の集落址が埋没しており、その中には奈良三彩や佐波理琺瑯・鉄鐸など注目すべき遺物も出土し、にわかに新しい視点からの総合的究明が期待される状況となった。

当センターの本年度調査は、この状況を踏まえて実施されたが、予想以上の結果をあげ、61年度調査へ継続されることになった。以下時代順に成果と問題点などを概観してみよう。

〔先土器・縄文時代〕

先土器時代は鉢伏山麓の諸遺跡に期待したが、山の神に黒曜石剥片のみのブロック1が出土しただけであった。縄文時代ではやはり中期が中心となり、上木戸では小規模ながら集落址が調査できた。遺物では大型釣手土器や火焰型土器に似た渦巻把手付台付鉢、5点一括土壌出土の硬玉製垂飾が注目された。

〔弥生時代〕

犬原での方形周溝墓、上下戸での集落址は予期以上の成果で、特に上木戸ではややまだ疑問はあるが環濠の検出、東海系土器と在地系土器の在り方に興味をも

たれた。わずか1軒とはいえ低位段丘面の北栗遺跡で検出された後期住居址の存在は今後へ課題を残そう。

〔古墳時代〕

山間地の竜神平で、土製模造鏡を含む祭祀土器のみの住居址2軒が調査され、その性格づけが注目される。

松本平低地部の諸遺跡では、ほぼこの期から散在的な集落形成が行われるらしく、南栗・三の宮で数軒検出され、新年度調査区域の状況によっては、以降の集落との関連究明に大きな期待がかけられよう。

〔奈良・平安時代〕

山間地遺跡では特記する事例は少ない。やはり低地帯が中心ではほぼ全遺跡が関連してくる。

なかでも田川流域の吉田川西遺跡は、本誌巻頭に一部紹介したように、中・近世に及ぶ大遺跡となり、その内容は整理作業の進歩とともに更に話題をよぼう。

一方、奈良井川・鎖川に沿う神戸から三の宮にいたる諸遺跡は、上二子をのぞく全遺跡で集落址が確認された。密集度の高い下神・南栗は鎖川を挟んで南北に対峙し、松本市教委調査分も含めると200軒を優にこえる住居址数となろう。また島立条里地帯の中にある北栗・三の宮遺跡も前代から中世に及ぶ住居址や掘立柱建物址・土墳墓・土壌群があり、畑址・水田址も一部検出されている。この両遺跡は「条里」との関連追及を大きな目標としたが、本年度はまだ調査区域の関係で良好な部分が少なく、新年度継続調査にける期待は大きい。いづれにしろ、現時点での想定坪割区画線上の地下から住居址などの遺構が発見され、更に集落址まで予想されることは、今後「島立条里」の成立や展開過程に再検討を迫る内容をもっているといえる。

こうした低地帯での集落址調査をふまえ、新年度は「松本平南部における古代集落の構造的分析」をテーマに全員が取り組むことになった。条里との関連もこの中で検討され、文献史学など他分野との交流も予定しているので種々御指導をおねがいしたい。

〔中・近世〕

前代同様低地帯各遺跡で掘立柱建物址・竪穴状遺構・土壌群が検出されている。北栗の松鶴鏡・馬歯を共伴する土壌群や三の宮の土壌墓群や畑址など、新年度調査結果では集落域のみでなく生産域・墓域といった生活空間全域の相関々係を解明できるのではないかな。なお吉田川西遺跡における、青磁・白磁を中心とした輸入陶磁器も当時の社会・文化環境を考える上で大きな役割を果たすであろう。

以上紙数の関係で不十分な説明であるが、近日中に「年報」発刊を予定しているので参照してほしい。



塩尻会場の展示会

3. 普及活動

調査第三部長 春原 正毅

発掘調査に追われた1年であったが、センターの使命でもある普及・公開活動にもできる限りの時間をさいて、地域住民の方々に我々の目的を理解していただいた。しかし、今年度は諸般の事情で十分とはいえず、新年度はその点を反省して取り組みたい。

(1) 現地説明会・地区展示会

- 8月12日 上木戸遺跡(約200名)
- 9月8日 下神遺跡(約300名)
- 12月1日 南栗遺跡(約100名)
- 12月7日 三の宮、北栗遺跡(約100名)
- 12月15日 吉田川西遺跡(約250名)

奈文研研修報告

1. 出土鉄器保存処理方法について

調査研究員 小松 望

最近、平地での発掘が増加し、それに伴って鉄器の出土も多くなってきています。それらのすべての処理を外部に依頼するには、時間的にも、経費の面からも制約があり、手を焼くことが多いと思います。そこで、奈良国立文化財研究所での研修をもとに、その処理手順の概略を記しますので、参考にしてください。

〈保存処理の手順〉

- ①土中から取り上げた鉄器は、とりあえずシリカゲル等を使い乾燥状態にしておく(湿気の強い場合は、アルコールに入れて脱水するのが有効)。
- ②必要に応じ、写真、実測、X線透過写真(錆の付着状況や鉄器の構造把握)等で記録をとる。
- ③錆取りをする。遺物が錆取りに耐えられない程脆弱な場合は、樹脂で固めながら行う。
- ④脱塩処理をし、錆の進行を抑える。

1月19日 塩尻市南熊井地区出土品展(約150名)

(2) 展示会

- 2月8日・9日 中央自動車道長野線建設用地内遺跡出土品展示会(松本あがたの森文化会 約800名)
- 2月22日・23日 同上(塩尻市総合文化センター 約1,000名)
- 2月27日～3月16日 同上(長野県信濃美術館)

このほかに、各遺跡発掘現場の作業員の方々のために小規模ながら巡回出土品展も開くことができた。なお、今年度は、吉田川西遺跡をはじめ各遺跡とも、ニュース性のある発見が相つぎ、テレビ・ラジオ・有線放送や新聞などマスコミ関係の話題にのぼることも多く、埋蔵文化財に対する関心がより高まったといえる。

(3) 刊行物

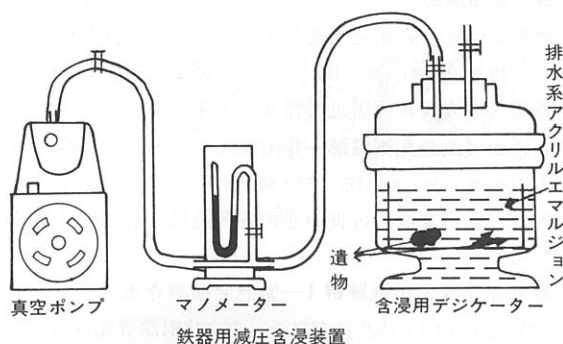
「長野県埋蔵文化財ニュースNo.13～16」・「長野県埋蔵文化財センター年報Ⅰ」(昭和57～59年度)・「長野県埋蔵文化財センター要覧」の編集発行をした。なお、現地説明会・展示会には、その都度資料を作成し参加者全員に配布した。

現在、「年報Ⅱ」(昭和60年度)や「紀要Ⅰ」、加えて調査の終了した岡谷市地区の正式報告書刊行にむけて作業が進んでいる。

アルコールに水酸化リチウムを溶かし、0.1%溶液をつくり、浸して脱塩する。(小さい物でも、最低2～3週間の脱塩期間が必要)。

- ⑤脱塩した鉄器はメチルアルコールで洗浄する。(水酸化リチウムが残存すると表面に炭酸塩鉱物の再結晶が付着する)。
- ⑥乾燥させる。
- ⑦減圧含浸装置で合成樹脂含浸をし、硬化させる。合成樹脂は非水系のアクリルエマルジョン(商品名パロイドNAD-10)を30%濃度にし使用し、30mmHgの減圧下で含浸する。(一夜の含浸で十分)。
- ⑧含浸後、乾燥させる。これらの含浸～乾燥行程は、少なくとも3回は繰り返す。なお最後の乾燥前に、つや消しのため、溶剤(アセトン、キシレン等)で表面を拭きとる場合もある。
- ⑨必要に応じ、接合、復元をする。
- ⑩含浸後の保管は密封容器(ポリ袋、タッパ等)にシリカゲルを入れ密封する。気化防錆剤利用も有効。

以上が遺物取り上げから保管までのあらましです。



当埋文センターでも、一昨年からこの方式で処理していますが、錆取り以外は比較的小さい労働で可能です。装置としては、脱塩用の密閉用器（アルコールの蒸発を防げるものなら可、当埋文センターではデシケーター使用）、減圧含浸用の真空ポンプ、マンメーター、減圧用デシケーターが必要です。ちなみに、これらのものは、デシケーターの径が30cmの場合で30万前後で手に入ります。

紙面の都合で細かい技術的なことはここに記せませんでした。奈文研発行の「埋蔵文化財ニュース、No.24、(1980. 3. 3)」等を参考にして研究していただければ幸いです。

2. 発掘技術者一般研修

調査研究員 小林 俊一

去る7月2日から8月9日までの6週間、奈文研の発掘技術者一般研修に参加する機会を得た。研修の内容は、発掘調査法概説から報告書の編集・刊行までの多岐にわたり、その間に各種遺物実測、測量実習を組み込んだ密度の濃いものであった。

以下にその一部を要約した佐原真先生の『土器』についての講義は、豊富な民俗例と実験例に裏付けられ、魅力に満ちたものであった。紙面の都合で、土器の多孔質に関わる部分だけ要約した。

土器を、陶器、炆器、磁器から区別し、その製作技術の発展段階を考える上で重要な観点の一つとなる多孔質の問題は、原料の採取から成形、調整、焼成、使用までの一連の過程を、人間の意図的な多孔質の増減という統一的な視点で観察する方向を与える。

- ・粘土の選択—一次粘土か二次粘土の粗放（coarse）なものを使用すれば多孔質が増し、二次粘土の緻密な（fine）ものを使用すれば多孔質は減ずる。
 - ・素地—基本的に2通りある。粘土に水を加えてこねると粗放な素地が、粘度を乾燥させ、砕いて粉末にし、更に篩にかけた後水を加えてこねると緻密な素地ができる。
 - ・混和材—普通には除粘の目的で加え、結果的に多孔質が増加する。ただし、草食動物の糞は加粘の可能性が高い。水簸は緻密さを増す。
 - ・調整—へら削り、刷毛目、貝殻条痕は器表の砂粒を動かして多孔質を増し、横ナデ、磨き（へら、丸石、骨、爪先）、スリッパ（エンゴベ、化粧掛け）叩き目は器表の多孔質を減ずる。
 - ・焼成時と焼成後—高温焼成や、焼成直後の燻べ焼き、漆の塗布、樹液の浸透、施釉により多孔質は減ずる。
- 以上の様な意図的な操作は、用途や美的効果、乾燥や焼成の仕方、施文と無関係でない。

こうした話の中で実験考古学の可能性と危険性についての先生の指摘は興味深く、民俗例との関わりの問題と共に考えさせられることが多かった。

長野県内調査報告書紹介（その2）

◆名廻・北丘B・柳沢・山の下遺跡—国営伊那西部農業水利事業緊急発掘調査報告 伊那市教委・関東農政局伊那西部農業水利事業所（60—2）（B5 26+9）〈縄文を主とした4遺跡の確認調査〉

◆小沢原遺跡—広域営農団地農道整備事業（長野県伊那西部地区）緊急発掘調査報告 伊那市教委・南信土地改良事務所（60—2）（B5 15+6）〈水神平式を伴う土壇5と中世末の炉址・井戸址各1基の報告〉

◆宮場間様1号墳—県単道路改良事業（沢渡・高遠線伊那市中殿島緊急発掘調査報告） 伊那市教委・伊那建設事務所（60—2）（B5 10+2）〈近世末の塚状遺構。

十三塚についても付記）

◆青木城遺跡—駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営は場整備事業（昭和59年度分）埋蔵文化財緊急発掘調査（同市発掘調査報告第18集）駒ヶ根市教委・南信土地改良事務所（60—3）（B5 103+18カラー3）〈縄文中期・平安末・室町・近世の複合遺跡、室町期の城館址が主〉

◆茶堂遺跡—長野県上伊那郡中川村片桐茶堂緊急発掘調査報告書 中川村教委・南信土地改良事務所（60—3）（B5 90+20）〈縄文前期初頭住5、弥生後期住2のほか中世掘立柱建物址4や溝、地下式貯蔵庫など〉

◆中山遺跡—緊急発掘調査報告書 箕輪町教委（60—3）（B5 27+10）〈小規模な縄文中期を主とした溝・土壇・炉址など〉

◆恒川遺跡群—昭和59年度範囲確認調査概報 飯田市教委 (60-3) (B5 9+8) 弥生後～古墳前期の方形周溝墓(溝)・住居址・土壇・柱穴址など

◆御射山遺跡発掘調査報告書—県道弘沢富士見線改良事業に伴う緊急発掘調査 富士見町教委 (60-3) (B5 6+4) <時期不明の小竪穴などと土師質土器少量>

◆門原白須遺跡—国道151号線改良工事に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 飯田建設事務所・阿南町教委 (60-3) (B5 35+15) <遺跡の少ない地域での縄文中、後期住7や土壇、石列、溝など>

◆黒田大明神原—第一次発掘調査報告書、上郷町教委 (60-3) (B5 21+12) <巾2m前後のトレンチ調査だが縄文中期5、弥生後期2の住居址や時期不明の柱列址1、土壇5など、付近出土土偶なども付記>

◆大麦田遺跡—県道粒良脇唐笠停車場線改良に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 飯田建設事務所・下条村教委 (60-3) (B5 31+10) <縄文中期1・弥生後期3・平安4の住居址のほか、土壇など>

◆松本城二の丸御殿跡—発掘調査・史跡公園整備 松本市教委 (60-3) (B5 253+65+付図4) <7年間に及ぶ発掘、整備の集成、近世中心の各種遺構や遺物が豊富に報告されている>

◆松本市赤木山遺跡群I—緊急発掘調査報告書 松本市教委・中信土地改良事務所(市文化財調査報告34号) (60-3) (B5 147+4+付図1) <縄文前期末住6、弥生後期方形周溝墓3と土壇、古墳時代住4などの白神場遺跡、縄文早期末の北原遺跡など>

埋文センター日誌抄 (昭和60年10月以降)

10月8日 県会土木住宅委員下神遺跡視察
10月11日 坪井清足奈文研所長吉田川西遺跡来訪指導
県4事務所長センター視察
10月14日 藤原宏志氏(宮崎大)神戸遺跡水田址について指導(15日まで)
10月15日 松鶴鏡出土(北栗遺跡)
10月17日 全埋文協研修会(京都、総務部長外3名)
10月18日 吉村県知事南栗遺跡発掘調査状況視察
静岡埋文研究所より2名視察来所
10月22日 埋文調査調整会議(公団・高速道局・文化課・埋文センター、於当センター)
松本市校長会下神遺跡視察
10月24日 松本市島内地区埋文調査説明会
緑釉陶器(完形)7点出土(吉田川西)
10月25日 全埋文協関東中部ブロック法人連絡協議会(宇都宮、常務・局長・調査第3部長)
10月29日 4県会議(浦和、調査第1部長)
10月31日 八稜鏡出土(吉田川西遺跡)
11月6日 田中琢(奈文研)・永峰光一(国学院大学栃木短大)・大沢和夫(県考古学会長)各氏吉田川西遺跡について指導
千葉県文化財センターより2名視察来所
11月8日 保坂松本教育事務所長センター及び発掘現場視察来訪
11月12日 群馬県埋蔵文化財事業団より2名視察来所
11月13日 NHK南栗遺跡取材
11月14日 東部町教委社会教育課職員センター及び吉田川西遺跡視察来訪

11月16日 県教委義務教育課・高校教育課の管理係長・指導主事ら遺跡及びセンター視察懇談
11月19日 吉田恵二氏(国学院大)吉田川西遺跡について指導(20日まで)
11月21日 三郷村文化財保護審議委員センター及び南栗遺跡視察来訪
11月22日 関プロ埋文担当者会議(長野市)の参加者(約40名)センター及び吉田川西遺跡視察来訪
11月28日 更埴市教委職員センター及び吉田川西遺跡視察来訪
12月1日 南栗遺跡(松本市島立)現地説明会
12月2日 発掘終了式(上木戸遺跡ほか5遺跡)
12月4日 辰野町教委職員視察来訪
12月7日 三の宮・北栗遺跡(松本市島立)現地説明会
12月15日 吉田川西遺跡(塩尻市広丘)現地説明会
12月25日 埋文調査調整会議(公団・高速道局・文化課・埋文センター 於松本合同庁舎)
1月19日 南熊井(塩尻市片丘)地区出土品展示会
1月22日 上条県出納長遺跡及びセンター視察来訪
2月4日 北山県出納長遺跡及びセンター視察来訪
2月8-9日 中央道長野線内遺跡出土品展(松本会場)
2月17-18日 「中近世陶磁器研究会」講師仲野泰裕(愛知県陶磁資料館)・藤沢良祐(瀬戸市歴史民俗資料館)各氏
2月22-23日 中央道長野線内遺跡出土品展(塩尻会場)
2月24-26日 「古代集落研究会」講師小笠原好彦氏(滋賀大)
3月11日 神奈川県立埋文センター3名視察来訪
3月14日 山形県教委文化課佐々木洋治主査視察来訪

あとがき：発掘・整理におわれた1年間でした。いろいろ御協力ありがとうございました。(春原)